

幽玄論史百年（一）

— 森鷗外と石橋忍月の「幽玄論争」をめぐって —

鄭 子 路

序

猿蓑の選を被りて不易流行のちまたを分かち、新風に臨みても幽玄の細みを忘れず。（森川許六『風俗文選』）

明治二三年、『うたかたの記』をめぐる森鷗外と石橋忍月の論争、所謂「幽玄論争」の発端以来、日本中世文芸の中心概念・美的理想の一つである幽玄に対する研究は、すでに百年余りの歳月が過ぎた。この時期に、「幽玄研究」は、日本文明の一つの縮図として、人々の叡智や努力によって膨大な成果を収めた。一方で、「幽玄研究」は、狭い国文学の分野に閉じられ、タコ壺化している。幸いにして、近來の国際日本学的視野と総合科学的研究手法の提唱によって、「幽玄研究」にも一種の機運が潜んでいるとはいえよう。

もとより、「日本学」という言葉自体は、二重の文脈に立脚している。一つは、江戸時代に興隆していた「からごころ」と対抗するために提出された「やまとこころ」（本居宣長「玉勝間」）としての「国学」の延長線にあり、もう一つは、現代欧米に成立して二十世紀末に日本へ逆輸入された翻訳語である^①。この平行する二重の文脈の下に、画期的・象徴的な事項として、昭和六三年「国際日本文化研究センター」が設立された。「いまや、日本文化は日本人にしかわからないなどとうそぶいている時代は終わった」^②と、当時の所長である梅原猛が宣言したとおり、幽玄など「純粹の日本出来のもの」（折口信夫「日本学及び五山文学」）も「国家単位のネーションの枠組み」から脱逸し、国際性が溢れたものとして生まれ変わってきた。その一方で、総合科学的研究は、リベラルアーツ重視の一般教育・教養教育から発展し、「基礎科学と人文・社会・自然の諸学を

総合することによって、新しいディシプリンをうち立て、時代と社会の要請に応える新しい枠組みによる現代科学を創造する」⁽³⁾ということを目指す。言い換えれば、今日、国際日本学的視野と総合科学的研究方法の並行的運用においては、伝統的学問がより深いところへ研究を推し進める方途があり、既存の学問的枠組みから新しい横断的学問領域へ改めて組み立てなければならぬ岐路をも示していると考ええる。

ところで、百年の歴史を作り上げた前人は、いったいどのような幽玄を論じてきたのか。それを明らかにすることは、輝く未来への通路であり、現在の幽玄論者の歴史的使命でもある。本論考では、このような、前人の努力によって培われた幽玄論を虚心坦懐に振り返り、史的に述評することを目的とする。しかし、すべての先行研究に逐一言及するのは、紙幅の限界もあるため、不可能である。従って、本論考では、重要なもの、あるいは大きな反響を及ぼしたものにだけに焦点を当て、その他を文末の付録に一覧の形で示す。具体的に展開する際、二部構成の形を取り、まず本稿で幽玄論の発端ともいえる森鷗外と石橋忍月の「幽玄論争」を中心に展開し、そして次稿（「幽玄論史百年（二）——複眼的・総合的研究への道程——」で久松潜一など幽玄論の土台を築き上げた国文学者、太西克礼・草薙正夫など幽玄論の境線を広げた美学者、さらに海外幽玄学の代表として最近かなり研究を進めてきた中国の幽玄論者の成果を順次に

考察・分析する。これらに基づき、最後に、新しい幽玄研究法・解釈学への通路を開くことを試みる。

一、「幽玄論争」の背景

さて、百年前の明治に目を向けよう。この波瀾万丈な時代に、見逃ししやすいものの、一つどうしても見逃せないヒト・コトがある。それは、すなわち佐藤春夫（一八九二—一九六四）などの文学史家に「近代日本文学の紀元」⁽⁴⁾と高く位置づけられた森鷗外（一八六二—一九二二）のドイツ留学——明治一七年八月から明治二二年九月にわたり、東京大学医学部を卒業して間もなく陸軍省に入省した森鷗外は、衛生制度調査および軍陳衛生学研究のため、ドイツへの留学を命ぜられていた——である。

留学中、とりわけミュンヘンに滞在したとき、鷗外にもっとも衝撃を与えたのは、『独逸日記』（明治十九年六月十三日）にも詳しく記されたルードヴィヒ二世と侍医グッデンの溺死事件である。彼は、これを素材として、ドイツ土産三部作の中で「もっとも浪漫味に富む、小説らしい小説」⁽⁵⁾と評価された『うたかたの記』（『しがらみ草紙』第十一号、明治二三年八月）を創作した。『うたかたの記』の内容と文学史上の意義について論を展開することが本稿の目的ではないが、これをめぐって石橋

忍月（一八六五—一九二六）^⑥と鷗外との間で繰り広げられた論争をもう一度見る必要があるのだろう。

なぜかという点、この論争は、近代化の大波に心酔した明治の人々に中世の遺物であった幽玄を想起させた契機であり、幽玄研究にとって重大な歴史的意義があるからである。のみならず、鷗外・忍月研究あるいは明治文芸批評・論争史の角度から見ても研究する価値のある論争であると考ええる。

しかし管見の限りでは、「幽玄論争」について専門的に論及したのは、鷗外側から論争方法を分析した嘉部嘉隆氏の「森岡外文芸評論の研究（五）」——「幽玄論争」の論理と方法（二）

——（『樟蔭国文学』第一九号、大阪樟蔭女子大学、一九八二年）や、論争内容を簡単に要約した長谷川泉の『近代文学論争事典・幽玄論争』（至文堂、一九六二年）と久松潜一の『日本文学評論史 近世・最近世篇 幽玄論』（至文堂、一九三六年）などの極少数の論考だけあり、「舞姫論争」や「没理想論争」に比べてかなり量が少ない^⑦。しかも、鷗外と忍月がどのように幽玄を理解していたのか、またはどのように幽玄を説くのか、を重点として論を展開する論文は一本もない、ということとはまぎれもない事実である。

なお、具体的な考察に入る前に、この論争は必ずしも統一された名称^⑧を有しているわけではないことも、告白しなければならぬ。本稿でこの論争を「幽玄論争」と呼んでいるのは、

『うたかたの記』をめぐる計二回の論争の中で、「幽玄」という言葉、概念が中心的論点をなしているためである。これ以前に、「演劇改良」や「舞姫」をめぐる忍月と鷗外の間すでに論戦が行われたことはともかくとして、明治二十三年十月二十三日の「国民之友」に発表された忍月の評論文「うたかたの記」により、われわれの関心を集めている「幽玄論争」が改めて上演し始めたのである。

二、「幽玄論争」の内容

以下では、原文を引用しつつ、「幽玄論争」の内容を少ずつ解説しておく。

まず引用したのは、論戦を直接に触発した忍月の評論文「うたかたの記」からの抜粋であり、忍月が鷗外の小説『うたかたの記』のあらすじを「偽狂」「真狂」「学問狂」に分けて忠実に紹介した内容を取り除き、評価的な発言だけを集めたものである。

（引用一、傍点は引用者、下同）

①文勢層疊語法健全縦横闊闊轉換多くして毫も滞礙せず、恰かも珠の盤上に走るが如し、然りと雖もこれ唯文章の末技に於て斯の如くなるのみ、更に翻つて此篇の成立し

たる所以、此篇の精神の注ぐ所を知らず。

②純粋のラブ其ものをアブゾルートに寫したるものにあらず、彼の舞姫のエリスと太田とのラブを是と同一轍の仕組にして、(中略)予は此ラブの成立は不感服なり。

③うたかたの記マリイの来歴の讀んで、而して涙を墮さざる者は其人必らず不情と、斯の如く賞賛するといへども、それは唯其外形についていふのみ、其内面の果して健全にして不朽幽玄の意思精神なるや否やは別問題に屬す。
(「うたかたの記」)

この抜粋を通じて、忍月が『うたかたの記』に対してどのような態度を持っているのが伺える。つまり、忍月は称賛の基調を持つている一方、傍点を引いた部分の通り、それぞれ疑問や指摘や保留するところもある、ということである。それに対し、いうまでもなく、鷗外は納得するわけにはいかなかった。彼は、書評的な「うたかたの記」とまったく異質の原理論的な「答忍月論幽玄書」(『しがらみ草紙』第十四号、明治二十三年一月)をもって応酬し、論理的戦陣を張った。意図的な戦略や論法があるかもしれないが、「答忍月論幽玄書」において、忍月が指摘した「ストーリーの仕組みの重複」についての回答が一切なく、「文章」や「内面」の問題しか取り上げられていなかったことは明らかである。こういう巧みな対応もしくは強引な論法

によつて、論争の中心も知らず知らずのうちに、具象的な記述的問題から鷗外の得意な抽象的な美学的討論へ移行してしまつた。

この論争は、主に次の二つの問題を巡つて展開されている⁽¹⁰⁾。

第一は文学の構成要素である。これについて、鷗外は「君は我文を評せむとするに當りて、三点に注視し玉へり。曰文章。曰外形。曰内面。」⁽¹¹⁾という「忍月の三分法」に対し、文学は主に「詩形」と「想髓」の二要素から構成され、忍月の主張するような「内面」は存在しないと、異なる主張を行つた。ところが、のちほど忍月が「鷗外の幽玄論に答ふる書」(『国会』明治二十三年一月三日、四日)で述べているように、これはあくまでも相手の主張を「誤解」あるいは「歪曲」したうえで生じた食い違いにすぎない。忍月の所論は図Iで示したように、実は鷗外と名称が多少変わっているだけで、趣旨は、ほぼ同じであると言つても差し支えない。

第二は「内面」(「想髓」)の中で捉えるべき「幽玄」のことである。この言葉、すなわち「不朽幽玄の意思精神なるや否やは別問題に屬す」という評価を最初に持ち出した時、忍月は幽玄についてこの箇所では言及せず、より詳しい説明がなかった。そのため、幽玄の意味を詳細に吟味した上で、この言葉を使用したとは思えないが、鷗外の場合は大きな問題となつてい

る。忍月に比べて、鵑外が幽玄を十分な紙面を使って定義したり、分析したり詳しく論じていることはもとより、文章のタイトルを「答忍月論幽玄書」にしていること自体もこの言葉を重要視し、関心を示していることが窺えよう。そういつた鵑外自身の関心とは別に、多少忍月への皮肉や揶揄の意味も含まれていると言っても過言ではない。

では、鵑外は具体的にどのように幽玄を論じていたのか。

何より先に直面しているのは、幽玄の定義、いわゆる「幽玄の何物たるか」という問題である。それについて、鵑外は次のように述べている。

(引用二) 美術の境界には、固より健全にして、幽玄にして、不朽なるものあり。そのこれなきは、美術として崇ぶに足らず。今煩を憚るゆえに、此健全而幽玄而不朽なるものを幽玄と称すべし。而してこれに当つべき洋語は則ち「ミユステリウム」ならむ。(中略) 小竹散人曰く。玄可析乎哉。可析非玄也。雖然非析則人莫知玄之不可析矣。美術の幽玄も亦析すべきものにあらねど、これを析して、以てその析すべからざるを知らしむるは審美家の務なるべし。学者の美を求むるに、曲線に於てするものあり。活動に於てするものあり。是れその比較的に抽象的なものなり。単純なるものなり。浅近なみのものなり。

漸く進みて「類想」に至り、又進みて「個想」に至るときは、其境地次第に「具象的」になり、複雑になり、遼遠になる。(中略) 狭くいはば詩中の幽玄、広くいはば美術中の幽玄、是れ「具象的」の美に於て「理路の極闇」処に存するものののみ。

彼によれば、ドイツ語の「ミユステリウム (Mysterium)」⁽¹²⁾に該当する「幽玄」は、美術を成立させる際に欠かせない神秘的・不可思議的な境地を指しており、江戸後期の儒学者である篠崎小竹(一七八一―一八五一)の言葉でいうと、「玄」と同じように解析できないものではあるが、「審美家」にとつては解析しなればならないものである。さらに、「類想」、「個想」、「具象的」などの美学上の概念・用語の導入によつて、「幽玄」は「具象的」の美に於て「理路の極闇」処に存するものののみ」と結論づけられている。その一方で、これらの概念について、鵑外はここでただ詩文を例にして説明し、丁寧な定義を下していなかった。それゆえ、われわれはこれらの例を通じて知ることが出来るのは、左のような浅薄なことのみである。つまり、「薄命の佳人」、「悪棍」、「忠臣孝子」などのような「形迹」または「理路」があつて、それぞれ「典型」に即して書かれたものは「類想」であり、他方「形迹」があるものの「理路」が捉えがたいものは「個想」である。これらの概念の間に、どのような上下関係があるのか、あるいはどのような解釈理論を打ち立てているのか、は未解決

のままである。

これらの問題を解くために、もうすこし岐路を渡り、この文章を鷗外早期の文芸批評活動の全般において見なければならぬ。周知の通り、鷗外が文芸理論家・批評家として文壇に初登場したのは、明治二二年「読売新聞」においての「小説論」(明治二二年一月三日)⁽¹³⁾の発表であり、ドイツ留学を終えた翌年である。その後、日清戦争の外征まで、彼は「鷗外漁史」として、上記のドイツ土産三部作という小説を世に出したのみならず、文芸評論家としても、外山正一との「画論論争」(明治二十三年五月六月)や坪内逍遙との「没理想論争」(明治二十四年十月二十五六月)などの活発な論争を呼び起こし、幅広い文芸批評活動に精力的に身を投じた。この際に、一番鋭い武器として運用されたのは、まさに彼に「標準的な文芸批評理論」として掲げられていたハルトマン (Eduard von Hartmann, 1842-1906) の美学理論である⁽¹⁴⁾。

このハルトマンから受容して諸論争に活用された鷗外の批評美学を一言にまとめていえば、すなわち類想・個想・小天地主義という三段階の結象理想説である。この結象理想説によると、概念的・類型的な〈想・想念(イデー)〉⁽¹⁵⁾は〈類想(ガツツンクスイデー)〉であり、これによって創られる作品は下位のものである。それに対して、真に個性的な〈想〉は〈個想(インディツアアルイデー)〉であり、それによって創られる作品

は中位である。この〈個想〉によって、またさらなる渾然たる一小宇宙を結象することができるのは、最高位にある〈小天地想(ミクロコスミスムス)〉である。この〈小天地想〉は彼の理想としている文芸の形態であり、ここで説く幽玄でもある。

そして幽玄の定義を下した後、鷗外が答えているのは、芸術創作あるいは鑑賞の主体としての人間と最高境地の「幽玄」との間にある連結・交流・交感の仲介的契機、いわゆる「幽玄をどのように会得するのか」という問題である。これについて、鷗外は次のように指摘している。

(引用三) 詩にても美術にても、此幽玄を会得するを悟といふなり。美術の天地には結象のために理路闇くなりたる外に幽玄あるべからず、此幽玄を知るより外に悟あるべからず。漢詩には嚴羽卿一悟字を得て、李献吉一法字を得たりなど称し、又禅学貴妙悟、詩道亦貴妙悟、然悟有三、有透徹、有分解、有一知半解と氷川詩式にいへる如き、審美的に詩理を尋繹する謂にもあらず、又一詩につきて幽玄なる乎幽玄ならざる乎と品評する謂にもあらず、要するに詩才の高下を論じて其神來の時に於ては、能く幽玄の境に入る所謂「シエニイ」を以て透徹の人となすのみ。詩筆に靈ありといひ、描写神に入るといふなど、苟くも詩の品評上に幽玄に遇ふことあらば、必ず理路闇

処に於てすべし。

つまり、その仲介的契機は〈悟〉というものである。幽玄は〈悟〉によってしか会得できず、「禪学」や「詩道」と同じように一定の美学的な標準をもって批評することが難しいものである。それゆえ、幽玄を実際の文芸批評に導入する場合、「この作品は幽玄であるか或は幽玄ではないか」と言うのではなく、「この作品を通じて幽玄の境に入ることを感じられたかどうか」を問うべきである。この「幽玄の境」に到達できる人は、いわゆる『シエニイ』を以て透徹の人となすのみ」というものである。周知の通り、「シエニイ (Genie)」という概念は、「十七世紀末に成立しており、常人とは質的に異なるといえるほどにかけ離れた創造力、及びそのような創造力の持ち主」⁽⁵⁾を指している。ここでドイツから留学して帰国した鷗外は、当時の多くの知識人がそうしたように、西洋理論に基づく「シエニイ」という言葉を持ち出していたが、実は裏面には、彼が納得したあるいは身近に感じ取ったのは、東洋伝統的な「詩禪一味」や「詩道一致」の学説である。その上、幽玄が理性ではなく、一瞬一種の感性、すなわち「悟」や「法」によって捉えるものである、と鷗外が理解していることが窺える。また、彼がわざわざ『滄浪詩話』の著者である宋の嚴羽（生年不詳）や「文は秦漢、詩は盛唐」と標榜する明の復古派学者である李夢陽（一四七二）

一五二九）や明の梁橋（生年不詳）の『氷川詩式』（一五四五）⁽⁶⁾を挙げたのは、なぜであろう。自身の博学さや主張の合理性と翌月の指摘の不合理を力証するためであることは、言うまでもない。それと同時に、右に示した通り、無意識のうちに鷗外は思想基盤をも示しているともいえるのではないか。

歴來の鷗外研究者は、森鷗外の思想基盤におけるハルトマンやゴットシャル (Rudolf von Gottschal, 1823-1909) の『詩字』 (Poetik, Die Dichtkunst und ihre Technik, Trewendt, 1882) の受容に注目しすぎており、鷗外が日本に居ながら習得した東洋詩学からの影響を常に見逃してきた。実は、鷗外は、「大抵禅道は惟だ妙悟にあり。詩道も亦た妙悟にあり。（中略）然れども悟浅深あり、分限あり。透徹の悟あり。但だ一知半解の悟を得るあり。漢魏は尚し。悟を仮らざるなり。謝靈運より盛唐諸公に至る、透徹の悟なり」⁽⁸⁾という「妙悟説」や「盛唐諸人惟だ興味にあり、羚羊挂角、跡求むべきなし。故にその妙処は透徹玲瓏、湊泊すべからず。相中の色、水中の月、鏡中の象のごとく、言尽るありて意窮なし」⁽⁹⁾という「興味説」から、最初の幽玄理解を得ており、また比較的理論的なまとまりを持っている『氷川詩式』によって、思想の内部に完全な詩歌理論を組み立てたのである。このことは、彼が直接引用している部分や、様々な記述から分かる。その中に、例えば、鷗外にしばしば使用された「理路闡処」という表現は、ある意味で嚴

羽の「羚羊挂角、跡求むべきなし（羚羊挂角、無跡可求）」から翻案されたものである、といつてもいいではないか。

最後に、幽玄と健全と不朽との関係について、鷗外は次のように述べている。

（引用四） 扱幽玄は何故に健全なるべきか。（中略）所謂健全は即是れ詩髓の健全、又詩想の健全なるべければ、其所在は自らこれを具象的意義の中に求めざることは不能。果して然らば幽玄裏には詩の健全存ずと謂ふも可ならむ。

又幽玄は何故に不朽なるべきか。（中略）語中に皮を貫き核に至り、人類の微を発すといへるは、詩に個想を出すものに非ずば、能くならずべきにあらず。されば古の大匠が其作をして能く星芒劍華の如く、千載湮滅せざらしめしは、自ら結象の美を得て歩を理路闇処に着けたるためならむ。

前述ですでに述べたように、鷗外の場合、幽玄は「小天地想」によつて結象した最高の境地であると規定されている。これは「癩病」や「髑髏」や「残菊」などの素材と一切関係せず、「詩想・詩髓」を形容する健全や不朽とも違っている。芸術の境地としての幽玄自身は、すでに健全や不朽たるものであるため、幽玄

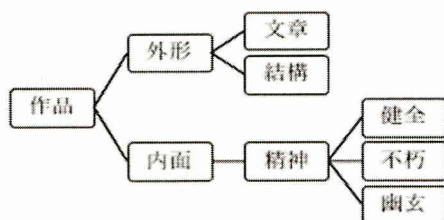
の中に健全や不朽があるという従属関係も自然に存在しない、と鷗外は主張している。その一方で、この三者の関係について、相手の忍月は「鷗外の幽玄論に答ふる書」（「國會」明治二十三年十二月三日、四日）に、鷗外と正反対の意見を出している。

（引用五） 健全の効は千種万種の想を唯一の象形に綜合統一して之を散乱せしめざるに在り。不朽の効は何れの地帯、何れの時代にも読まれて、永遠無窮に適応貫通するに在り。而して幽玄とは形而上（ユベルジンリヒ）とギョットリヒとを合わせたものにして、其の妙は言外に存し、無形里に存す。（中略）幽玄亦た然り、之を分析する能はず、解剖する能はず、予は之を人々の默会暗認に任せんのみ²⁰。

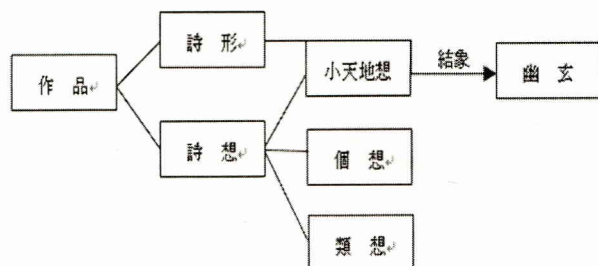
忍月の場合（図一参照）²¹、作品の内面に「精神（想髓）」というものがあり、「精神」をさらに幽玄、健全、不朽という三つの要素に分ける。この三つの要素の効用はそれぞれである一方、「一つの精神より出でて精神に歸し、無形より出でて無形に入る」ものでもある。それゆえ、「幽玄裏には健全あり、不朽裏に幽玄ありと謂ふも、亦た不可なかるべし」と忍月は持論を展開している。

結

【図Ⅰ 石橋忍月の批評理論構造】



【図Ⅱ 森鷗外の批評理論構造】



以上、「幽玄」についての論述を中心に、森鷗外と石橋忍月との論述を考察してきた。全体として、確かに長谷川泉氏が指摘した通り、「美学的根拠の確かさ、論理の精緻さ、例証の豊かさなどにおいて忍月は到底鷗外の敵ではなかった」⁽²²⁾。例

えば、幽玄の効用について、忍月は次の式、すなわち

幽玄Ⅱ（形而上Ⅱ「ユベルジンリヒ」）＋「ギョットトリヒ（神的）」

を導き出したものの、解析は一切していない。そこを鋭い鷗外は逃さず、すぐ「此幽玄の式の当否は忍月が『メタフィジック』と其神（ゴット）の説と世に公にせられざる間は誰にも充分には分るべき理なし」⁽²³⁾と揶揄された。また、幽玄と健全や不朽との関係について、忍月も持論の二律背反、すなわち効用が異なる三要素はどのような構造で互いの交錯・包含を実現するのかという命題を解決することもまったくできなかった。

その一方で、鷗外が論争の勝利を収め⁽²⁴⁾、提出した幽玄の解釈も図Ⅱのように、辻褄が合うものであるとはいえるが、未解決あるいは不足なところもやはり露呈している。これは主に、推論の過程に「帰納的批判」の内容が欠如していることによると考える。当時の文壇において、文学の批評方法をめぐって、坪内逍遙（一八五九～一九三五）が提唱した「帰納的批評」と、「西欧文学者が審美学の基址の上に築き起したる詩学を以て準繩となす」（『しがらみ草紙』の本領を論ず）『しがらみ草紙』創刊号、明治三二年（一〇月）』という鷗外が樹立しようとした「美学的批評」との間に激しい対立がある。実は、「帰納的批評」であれ、

「美学的批評」であれ、二人とも間違いない。もしくはこの二つの方法が互いに補足し合わねばならず、一方が欠けていてはならない。いうまでもなく、先行の「帰納的批評」がなければ、客観的・全面的な「美学的批評」もできないであろう。「幽玄」について鷗外の論述は、まさに「帰納的批評」を飛ばして直接に「美学的批評」を行ったものである。従つて、やや根拠不足の感じがするしか仕方がない。また、彼が取り上げた幽玄はただ存在論次元にある幽玄の一側面だけであり、具体的な芸術の様式の種類としての幽玄の美的内容は少しでも含めていなくて言及されていなかった、と指摘する必要もある。ところで、結果にかかわらず、このような東洋詩学の中心概念である〈幽玄〉を西洋美学理論より解釈するという研究姿勢やアプローチ自体はすでに、その後の研究者に軽視できない影響や示唆を与えており、高く評価されるべきである。さらに、我々が説いた「幽玄論」の百年の歴史も、まさしくこの論争から形式的に始まったのである。

注

(1) つまり、古典作品の文献学的なアプローチによるジャパンノロジーと現地調査や統計を用いる社会科学的手法による地域研究としてのジャパニーズ・スタディーズを統合したジャンルである。詳しい成立経緯については、ジョセフ・キブルツ

『《Japanese studies》』『日本学とは何か…ヨーロッパから見た日本研究、日本から見た日本研究』法政大学国際日本学研究センター、二〇〇七年、七・一〇頁を参照されたい。

(2) 猪木武徳等編『新・日本学誕生 国際日本文化研究センターの二五年』、角川学芸出版、二〇二二年、一三頁。

(3) 生和秀敏「広島大学における教養的教育のあゆみ」『広島大学史紀要』第四号、広島大学五十年史編集室、二〇〇二年、五四頁。この理念を早いうちに意識し、真つ先に実践して開花したのは、まさしく昭和四九年広島大学総合科学部の創設であろう。広島大学総合科学部の創設事情とその理念について上注の生和秀敏氏のものと同紀要に掲載されている小池聖一氏の『紛争』から『改革』へ——教養部の改組・総合科学部の創設——が詳しい。

(4) 長谷川泉『近代日本文学の位相・上』桜楓社、一九七四年、二〇四頁。

(5) 稲垣達郎『舞姫・うたかたの記他三篇・解説』岩波書店、一九八一年、一七五頁。

(6) 鷗外がドイツ留学を終えて帰国した明治二十一年、忍月はまだ帝国大学法科大学の二年生であったが、すでに『女学雑誌』『国民之友』などに多数の批評文を発表し、世間の注目を集めている新鋭文芸評論家であった。

(7) その理由は多岐にあるが、その中の一つは「幽玄論争」

に關する鷗外の文章の收録状況によるのではないかと考える。つまり、坪内逍遙との論争に關する一連の文章は鷗外自身の意圖的整理によつて、有名な「柵草紙の山房論文」として各パ

ジョンの「鷗外集」に收録され、今日にも広く読まれているのに對し、「幽玄論争」に關わるものは岩波書店の『鷗外全集』第三二卷（全三十八卷一九七一一一九七五年）や田中実編『作家の随想1森鷗外』（日本図書センター、一九九六年）にしか收録されず、筑摩書房の『鷗外全集』（全一十四卷、一九九五～一九九六年）などには收録されていない。

(8) 「幽玄論争」はもとより、「幽玄論論争」（関良一）、「うたかたの記」をめぐる論争（長谷川泉）、「うたかたの記論争」（磯貝英夫）などの呼び方もある。嘉部嘉隆氏は「森鷗外文芸評論の研究（五）——「幽玄論争」の論理と方法（二）——」（『樟蔭国文学』第一九号、大阪樟蔭女子大学、一九八二年、八〇頁）に詳しく挙げたことがある。

(9) 『明治文学全集』三三 山田美妙・石橋忍月・高瀬文淵集』筑摩書房、一九七一年、二七四～二七六頁。以下、忍月のものはすべて本書から引用したものである。

(10) 「文章が末技である否や」について二人も議論したが、結局、二人とも合理的な論拠を挙げずに平行線のように終わってしまったため、本稿はその部分の内容を省略する。

(11) 森田太郎『鷗外全集』第二十二卷、岩波書店、一九七三

年、二八七頁。以下、鷗外の原文はすべてここから引用したものである。

(12) 在問進編『アケセス独和辞典』（第三版、三修社、二〇一〇年、一〇七三頁）によれば、Mysterium は「(一) 神秘、不可思議 (二) 「複数で」 秘儀、密儀 (三) 「複数で」 神秘劇」の意味である。

(13) 題名の下に (Cfr. Rudolph von Gottschall, Studien) という注記があり、ゴットシャルに拠つてゾラ (Émile François Zola, 1840-1902) の実験小説論を批判し、小説は科学と違つて空想によつて書かれなければならないという「空想小説論」を主張している。これは鷗外が批評家・翻訳家としての第一声であり、その後の鷗外の文学論の根本を示していると言つてもよい。なお、この論文は「医にして小説を論ず」と改題して「柵草紙」の第二十八号に收録され、また「醫學の説より出でたる小説論」という題名で評論集『月草』に收録されたこともある。

(14) 外山正一、坪内逍遙との論争の概要またはハルトマンの紹介、鷗外との出会いなどの問題は、拙稿「日本アカデミック美学の淵流考」（山西大学編『第八回東方美学会報告書』、二〇一六年）を参照されたい。

(15) 坂井健「観念としての『理想(想)』——鷗外「審美論」における訳語の問題を中心に——」（『日本語と日本文学』第一六号、筑波大学国語国文学会編、一九九二年）によると、ヘイ

デー」という概念は、主観的意識内容としての観念と超越的存在としての理念との二つの意味があり、ハルトマンは『美の哲学』にははつきり「*idea*」と「*idee*」を使って区別しているが、鵬外はそれを全部「理想（想）と混同した」。

(16) 佐々木健一『美学辞典』東京大学出版会、一九九五年、八九頁。

(17) ここで挙げた東洋詩学の著作の中で、鵬外が親しみ、熟読したと思われるものは、有名な嚴羽と李夢陽の詩論よりも、むしろこの比較的にあまり有名ではない『氷川詩式』であると思われる。『氷川詩式』というのは、明の嘉靖三十四年（一五四五）に完成され、古人の著作を援引した上で、詩の作法を主に論じたものであり、十巻の内容を六門（定体・句法・貞韻・審声・研幾・綜韻）に分けて構成されている。張渙という人物が記した「氷川詩式序」によると、この本は、「而詩有式、則始於沈約、成於皎然、著于滄浪。若集大成、則始於今公濟甫云（詩について、様式という区分は、沈約から始まり、皎然になって成熟となり、『滄浪』に著述された。しかし集大成というのは、即ち今の梁橋でなければならない）」原文は『和刻本漢籍隨筆集』第十七集、汲古書院、一九七七年、二二三八頁から引用し、日本語の訳文は筆者による）というように、詩歌の様式を論じた集大成のものであるという。さらに、康欣『梁橋『氷川詩式』詩学思想探究』（河北師範大学学位論文、二〇一四年、一頁）によると、『氷川

詩式』は明末清初に日本へ伝えられており、当時の日本人が中国の詩学を理解する重要な教材となっていた。また、筆者の調査によると、日本には万治十二年（一六六〇）五月京都小嶋彌平次・玉村次左衛門刊本（大七冊）があり、現在は『和刻本漢籍隨筆集』第十七集（汲古書院、一九七七年）に収録されている。

(18) 書き下し文は市野沢寅雄『滄浪詩話』明徳出版社、一九七六年、二一頁から引用。原文は「大抵禪道、惟在妙悟。詩道、亦在妙悟。（中略）然悟有淺深、有分限、有透徹之悟、有但得一知半解之悟。漢魏尚矣、不假悟也。謝靈運至盛唐諸公、透徹之悟也」である。

(19) 書き下し文は市野沢寅雄、前掲書、三六頁から引用。原文は「盛唐諸人、惟有興味、羚羊挂角、無跡可求。故其妙処、透徹玲瓏、不可湊泊。如空中之音、相中之色、水中之月、鏡中之象、言有尽意無窮」である。

(20) 同注九、二七七頁。

(21) 鵬外がゴットシャルやハルトマンから芸術批評理論を学んだというように、忍月が批評活動を展開する際に主に依拠したのはレッシング（Gothold Ephraim Lessing, 1729 - 1781）の理論であった。また、彼の芸術的見解をもっとも集中的に現したものと、「想実論」（『聚芳十種・第八卷 黄金村』収録、春陽堂、明治二十五年）というまとまったものがある。

(22) 長谷川泉『近代文学論争事典』一九六二年、四五頁。

(23) 「忍月が再び我に答ふる書を見る」、同注一一。
 (24) 「幽玄論争」の後、二人は「文づかひ」などについてまた論争を行ったが、結局忍月は「レッシングが事を記す」(『しがらみ草紙』二二号、明治二四年六月)によって再起不能の打撃を受け、内務省の就職をきっかけに文壇を去った。

付録―幽玄論一覽(縮訂版)

(注) 雑誌の場合は出版機関を省略し、同文章が再収録・出版された際は原則として初出だけ掲出する。

年号	著者名	題目名(出版元)
一八九〇	森鷗外	「答忍月論幽玄書」『しがらみ草紙14』
一九二七	久松潜一	「隅外の幽玄論に答ふる書」『国会12(3・4)』
一九三〇	久松潜一	「鎌倉時代の歌論…『幽玄』『有心』の歌論」『日本文学講座5』新潮社
一九三五	竹内敏雄	「幽玄論の変遷の一動機」『東京朝日新聞』…「幽玄の語の典拠その他」『歌と評論』…
一九三六	岡崎義恵	「幽玄の妖艶化と平淡化…正徹心歌の文学論の考察」『国語と国文学79』
一九三九	大西克礼	「世阿弥に於ける『幽玄』の美的意義」『思想155』
一九四一	辰巳善雄	「有心と幽玄」『日本文芸学』岩波書店
一九四一	辰巳善雄	「幽玄論」『日本文学評論史・近世 最近世篇』至文堂
一九四一	辰巳善雄	「幽玄とあはれ」岩波書店
一九四一	辰巳善雄	「判者俊成の幽玄」『国文視野7』

一九四二	伊東一雄	「幽玄美の風土的性格」『東洋大学論纂2』
一九四三	谷山茂	「幽玄の研究」教育図書…「幽玄…藤原俊成を中心として」『日本諸学研究報告20』
一九四三	小西甚一	「幽玄の原意義」『国語と国文学20(6)』
一九四四	野上豊一郎	『能の幽玄と花』岩波書店
一九四四	能勢朝次	『幽玄論』河出書房
一九四六	積善館	『幽玄』
一九四八	佐藤堅司	「漱石文学に於ける幽玄性」『大法輪15(10)』
一九四九	久松真一	「幽玄論」『禅の論攷…鈴木大拙博士喜寿記念論文集』岩波書店
一九五〇	佐藤堅司	「八大伝における幽玄性」『知と行5(5)』
一九五一	釘本久春	「幽玄」『日本文学講座7』河出書房
一九五一	井手恒雄	「幽玄…仏教との関聯に於いて」『文芸と思想3』
一九五二	峯村文人	「幽玄と面影」『人文研究106』
一九五二	小西甚一	「俊成の幽玄風と止観」『文学20(2)』岩波書店
一九五三	竹内てるよ	「能における幽玄と夕鶴の幻想」『観世19(1)』
一九五三	古川久	「狂言の物真似と幽玄」『東京女子大学論集3』
一九五三	小島英幸	「舞歌幽玄にかこつけて」『能7(4)』
一九五五	細谷直樹	「幽玄再考」『国語4(2)』
一九五五	田尻嘉信	「幽玄について」『跡見学園国語科紀要』
一九五五	藤平春男	「藤原俊成の幽玄論ということ」『国文学研究12』
一九五六	実方清	「正徹の幽玄論」『文芸研究24』
一九五七	稲田繁夫	「藤原基俊の歌論の意義…特に俊成の幽玄論成立過程における」『人文科学研究報告6』
一九五七	大原幽学	「趣味幽玄考」『日本哲学思想全書14』平凡社
一九五七	赤羽学	「古代の幽玄」『文芸研究26』

一九七一	佐伯仁三郎	「幽玄序説」「創価大学開学記念論文集」
一九七二	久松潜一 小沢良衛	「幽玄と「さび」との関係…日本美の系譜より見た」 『東方学論集』 「禅竹と幽玄…鬼について」『文学研究36』
一九七三	草薙正夫 藤平春男 浦木まさ子	「幽玄美の美学」塙新書 「幽玄と有心」『国文学研究49』 「世阿弥の幽玄論」『青山語文3』
一九七四	石黒吉次郎	「田楽の芸風と観阿弥・世阿弥…「花」「幽玄」に關連して」『国語と国文学51(11)』
一九七五	真下五一 白洲正子 高橋雄四郎 山岡泰造	「西行…幽玄の人」国書刊行会 「風雅と幽玄」『日本教養全集15』角川書店 「定家とイェイツ…幽玄と象徴をめぐって」『実践英文学7』 「飄飄とした心に映る情趣…花月風詠の心根とその幽玄なる精神を訪ねて」『日本及日本人 ¹⁵³⁵ 』
一九七七	半田美永 萩野貞樹等 味方健 峰村文人 吉田究 武田元治	「鴨長明の歌論…幽玄」の論理『皇学館論叢10(1)』 「道統の心…幽玄について」特集『日本及日本人 ⁵¹ 』 「幽玄序説…世阿弥「幽玄」再考」『国崎望久太郎教授退職記念論集』 「新古今集」時代の「幽玄体」『人文科学研究所…キリスト教と文化12』 「幽玄」…藤原俊成を中心に『大阪産業大学論集・人文科学43』 「長明歌論における「幽玄」について…俊成の「幽玄」との比較考察」『大妻国文8』…「俊成歌論における「幽玄」について」『大妻女子大学文学部紀要9』
一九七八	佐々木克衛 西尾陽太郎	「正徹と幽玄美…自讃歌自注の例…二・三をめぐって」『日本文学27(7)』 「花・位・幽玄…世阿弥の能楽芸術論」『西南学院大学文学理論集18(2)』
一九七九	味方健 高橋和幸 武田元治 奥村晃作	「幽玄再説」『和田繁一郎教授退職記念論集』立命館大学人文学会 「世阿弥の幽玄の本質」『日本文芸研究31(4)』 「俊成歌論における「幽玄」と「艶」の結合について」『大妻国文10』 「新幽玄体…北原白秋(明治18年〜昭和17年)…第四期象徴詩運動をめぐって」『短歌研究36(8)』
一九八〇	渡辺守章編 中性哲 小田幸子等 藤田陽子 田代慶一郎	「幽玄…観世寿夫の世界」リポロポート 「俊成における幽玄の構造」『手嶋政男教授退官記念論集』 「世阿弥…花と幽玄へ特集」『国文学…解釈と教材の研究25(1)』 「俊成歌論における「艶」と「幽玄」の相関性」『日本文藝学15』 「忠度…軍体の幽玄能」『国文学…解釈と教材の研究25(1)』
一九八二	高橋和幸 谷田部博子 石黒吉次郎 田中克己 小山美智子	「世阿弥における幽玄と余情の相関」『人文論究31(3)』 「藤原俊成における「幽玄」」『日本文学論叢7』 「田楽の芸風と観阿弥・世阿弥…「花」「幽玄」に關連して」『中世演劇の諸相』桜楓社 「新能・火と闇に花ひらく幽玄の世界」主婦の友社 「立花口伝大事」にみえる道誉の幽玄…世阿弥伝書との比較より『論究日本文学46』
一九八四	久保田淳 邦光 史郎 柴田 勝二	「幽玄とその周辺」『講座日本思想5・美』 「伝説とその舞台…幽玄と不思議の世界」講談社 「能における幽玄」『待兼山論叢18・美学篇』
一九八五	手嶋政男 武田元治 馬場あき子 篠弘	「有心と幽玄」空閑書院 「幽玄様」考…定家10体の内「大妻女子大学文学部紀要17」 「白秋の短歌と古典…新幽玄への道程に」『短歌32(7)』 「歌集「深流唱」と「櫓」…「近代幽玄体」の葛藤」『国文学…解釈と鑑賞50(13)』

一九八六	鴨志田恒世 北村恒男 梅野きみ子	『幽玄の世界・神道の真髄を探る』潮文社 『紋・幽玄の美』フジアート 『幽玄』の源流と平安文学への反映『中古文学と漢文学』汲古書院 『定家・正徹の幽玄について・神女の系譜』言語と文芸99 『狂言と幽玄』因幡堂に見る狂言の特色『淑徳大学研究紀要20』 『花』幽玄から『妙花風』へ…世阿弥能楽論の1つの達成『文芸研究12』 『幽玄と物語取り』『日本文芸史』表現の流れ2
一九八七	伊庭京子 Steve Odin 藤井貞和等編	『一条良基の幽玄論』『日本文芸の形象』前田妙子博士退任記念 和泉書院 『陰翳の美学』日本の芸術と文学の幽玄様式について『思想762』
一九八八	赤羽学 池谷敏忠	『幽玄の探究』清水弘文堂 『幽玄な秩序の世界をめざす』Sevensの『黒鳥の13の見た方』論『中京大学文学部紀要23(3・4)』
一九八九	斎藤望 大澤聖子	『井伊家伝来の大名美術』11 幽玄の美『日本美術工芸614』 『鬼と幽玄』世阿弥の能楽論を読む『学習院大学国語国文学会誌32』
一九九〇	谷山茂 三崎義泉	『妖艶と幽玄』『文学・語学126』 『榊竹の幽玄』と本意思想の「元初ノ一念」『天台学报32』
一九九二	相川宏	『美の無何有郷(ウー・トポス)』幽玄詩想論『日本大学芸術学部紀要22』
一九九三	篠弘	『白秋』『新幽玄の実現』『短歌40(5)』
一九九四	武田元治 福田秀一 山本一 島津忠夫 三崎義泉 モリー・ロバートン	『幽玄』の変遷『大妻国文25』 『日本歌論における幽玄』研究史素描・藤原俊成の場合を中心に『東方学87』 『幽玄』和歌的なものの周縁『日本文学43(7)』 『千載集の幽玄と清澄』『短歌41(9)』 『世阿弥・榊竹の妙・幽玄と天台の妙』『天台学报55』 『双方向通信』『万葉集』深夜の幽玄な熱気がフアックスに流れ込む『文学界48(11)』

一九九五	馬場あき子	『源氏物語と能』雅びから幽玄の世界へ』婦人画報社
一九九六	松岡心平 白洲正子	『幽玄が円寂するとき』一休・榊竹の世界』『文学7(2)』 『足姿は幽玄の本風也(両性具有の美14)』『新潮93(5)』
一九九七	藤井たぎる 山本一 久松真一 加藤健一 久保田淳 森秀人	『下山一二三あるいは幽玄の世界の媒介者』『言語文化論集19(1)』 『六百番歌合』判詞の「幽玄」『国語と国文学74(11)』 『幽玄論・特に能における』『叢書禅と日本文化4』ベリかん社 『原心景としての幽玄』『日本及日本人1625』 『幽玄の道君臣是を重くすといへども』徒然草評釈209『国文学』解釈と教材の研究42(2)』 『伊勢物語の周縁と歌道』幽玄の世界と隔たる業平をめぐる虚実の「なりわい」について『日本及日本人1625』
一九九九	高田恵利子	『物語詩』『王子の旅路』における幽玄な叙情の世界』『清泉女子大学紀要47』
二〇〇〇	福原博篤	『環境背景音考(25)能と音』幽玄の世界と近代技術』『環境と測定技術27(7)』
二〇〇一	筒井絃一等 山本一	『茶能歳時記・茶と幽玄の出会い』 『俊成最晩年の「幽玄」をめぐる力学』『金沢大学教育学部紀要人文科学・社会科学50』 『源氏供養のこと』紫式部の幽玄な生と死』日本及日本人1640
二〇〇二	叶渭渠 袁波 観世榮夫等	『物哀と幽玄』広西師範大学出版社 『水墨画・幽玄の美』秀作社出版 『私の生き方(37)』七十五歳の「初心」…能楽界の風雲児が語る幽玄の世界』『公研40(11)』

二〇〇四	梅原猛 福澤猷男 畑中圭一 川口紘明	『パサラと幽玄』学習研究社 『東洋の心、幽玄を追って』美研インターナショナル 『童謡集』月と胡桃『所収作品に見られる新幽玄体について』『児童文学論叢10』 『溪流唱』と『檉』…写生即象徴の詩法、新幽玄『国文学・解釈と鑑賞69(5)』 『千載和歌集』の幽玄と清澄『島津忠夫著作集7』和泉書院
二〇〇五	島津忠夫 佐々木雅代 村田真一 高良和子	『能面に浮かぶ幽玄の美』133 『八幡宇佐宮御託宣集』における「幽玄」の論理…託宣と本地をめぐって『佛教大学大学院紀要33』 『優美・繊細・幽玄…比嘉清子の舞の特色』『琉球舞踊古典女踊りの母…比嘉清子伝』 『わび・さび・幽玄…日本的なるもの』への道程』水声社 『評論能の幽玄その序説』『扇影・村岡圭子作品集』博士論文
二〇〇六	鈴木貞美等編 村岡圭子	『非幽玄能の諸相と中世文芸との相関性』法政大学博士論文 『幽玄の変遷』『海外の日本文学』武蔵野書院 『幽玄』に魅せられて『大阪成蹊大学芸術学部紀要3』
二〇〇七	伊海孝充 福田秀一 粉川輝子	『幽玄研究』吉林大学出版社 『日本人の眼(16)幽玄と自然』『表現者16・17・18』 『八幡宇佐宮御託宣集』における「幽玄」について…託宣への注釈と思考『日本文学』57(4)』
二〇〇八	李立軍 城戸朱理 村田真一	『能の幽玄』『能とは何か…野上豊一郎批評集成』書肆心水 『幽玄に読みなす物語』『伊勢物語創造と変容』和泉書院 『幽玄』から「枯淡」へ…(西行楼)と《芭蕉》の曲趣をめぐって『法政大学大学院紀要63』 『日本の能の幽玄と韓国タルチュム(仮面舞)のシンミョンブリ』『日本学士院紀要63(3)』
二〇〇九	野上豊一郎 海野圭介 周重雷 趙東一	

二〇一〇	瀧悌二	『安達時彦…能の幽玄を絵画する試み』『月刊美術36(5)』 『釈幽玄…対日本古典文芸美学中的一个關鍵概念的解析』『広東社会科学6』 『幽玄がらする詩学』『文学12(4)』 『幸田露伴「幻談」試論…幽玄世界との境界』『国文学踏査23』 『好色と幽玄…(歌)のちからについて』『文学・語学199』
二〇一一	王向遠 長谷川千尋 渡辺賢治	
二〇一二	白洲正子 田中久文 稲生平太郎 伊藤正義	『お能の幽玄』『精選女性随筆集7』文藝春秋 『日本美を哲学する…あはれ・幽玄・さび・いき』青土社 『心界幽玄のこと』『何かが空を飛んでいる』国書刊行会 『世阿弥の能と幽玄』『伊藤正義中世文華論集2』和泉書院
二〇一三	雲丹亀五郎 政成功 石橋妙子 山本一 佐藤透	『幽玄と百人一首』『日本文学論叢42』 『古代文学の信仰的発生と新古今和歌集への伝統的歌風・歌調の特徴に關しての考察…主として歌風と「新古今調」の歌論を巡っての幽玄思想への考察』瑞穂大学院 『花と幽玄の覚書』本阿弥書店 『藤原俊成…思索する歌びと』三弥井書店 『幽玄美とは何か…ヨーロッパ美学からの照射と返照』『ヨーロッパ研究9』
二〇一四	森神道遥 井上正 彭浩	『花びら然び幽玄のころろ…西洋哲学を超える上位意識』桜の花出版 『世阿弥の能芸論…「衆人愛敬」と「幽玄」について』『帝京大学教育学部紀要4』 『伝統文化における幽玄の美…茶の湯から考える』『人文研紀要84』
二〇一五		
二〇一六		

二〇一六	渡辺賢治天	「幸田露伴『幻談』試論…幽玄世界との境界」『国文学年次別論文集』朋文出版
野文雄		『松風』・世阿弥が仕上げた「幽玄無上」の能『世阿弥を学び、世阿弥に学ぶ…12人の専門家が「世阿弥」を語る…講演・対談集』大阪大学出版会